

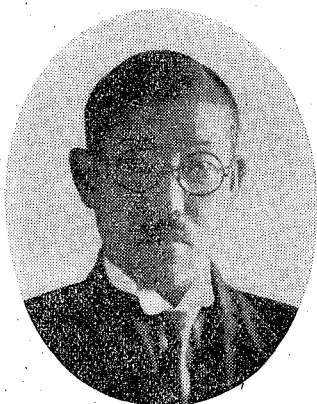
説苑



歴代内務土木局長と其時代 (十六)

—— 故丹羽七郎氏 ——

清水生



前號まで連載 郎氏を月旦することにした。

してゐた「内務 明治維新の三傑の獨りである西郷南洲先生は、その幕下
 技監と今昔」は の猛將桐野利秋が嘗て或る人を南洲先生に批判したのに際
 今回都合によつ して、これをヂツト聽いてゐた南洲は「おわはんは其人に
 て一先つ筆を止 遇うたことがあるか」と尋ねたので、利秋は「わいどんは
 めて本誌からは まだ一度も遇ふたことはござせん、然し篠原どんから聞い
 再び元に戻へて たことぞござす」と答へると、西郷先生は容を改めて静か
 「歴代内務土木局長と其時代」と題して順序上故丹羽七 に「桐野どん夫れはいかん、あんたが其の人に一度も對面

せむに單に他から聞いた丈けで批判するのはどぎやうことか」と戒めたそうである。

筆者はこゝで熟々と西郷先生の言はるゝことは最もなことであると感じたのである、敢て人物に限らず山水風景でもそこに一度も行つて見ずして如何に絶景の地でもこれを天下の勝景の地として吹聴したり亦筆にする譯けには行かぬ、例ひ夫れが人々に依つて稱讚せられてゐるところであつたとしても、自分が行つて見れば案外つまらぬ所かも知れん、況んや自分が一度も行かずして人々の稱讚に附和雷同するのは如何かと思はれる、人間もその通りであつて例ひ他人が口を極めて褒めても古今の史的人物は別として其の人間に遇ふて見ると案外つまらぬ人物で有り又例ひ位階や勲等位置が低くともその人格と云ひ、識見と云ひ、其他總ての點に於て申分のない立派な人物であると感じて自然に頭の下るを感ずることもある、嘗て筆者は往時新聞記者時代に其の職責上種々幾多の人々に遇ふたが、其の實例に照してこれは決して間違はないと今尙確信を持つてゐる。

閑話備置……故内務次官丹羽七郎氏……此人には筆者は嘗て一度も對面した機會は無かつた、従つて此の人を書くのは筆者は前記のやうな理由の下に誠に無謀であり、又所謂盲ら蛇に恐れずの感がある、然し丹羽氏が健康にして現世に今尙居らるゝなれば、何を偕て置いても早速訪問して親しくその醫咳に接して見るのであるが、生者必滅の原理は人力を以て如何ともなし難く丹羽氏とは幽明異にしてゐるから、到底望まれないことである、夫れ故に筆者は已むを得ず氏に付ては他から聞いたこと等を綜合してこれを觀察して書いて見るより他に良法はない、故に必ずしも正鵠を得るとは斷言出来ないのを斷つて置く。

先づ丹羽氏の家柄やその略歴を見ると、氏は明治十八年三月七日に北海道後志國瀬棚郡丹羽村の開祖丹羽五郎氏の五男として同所に生れてゐる、氏の家は代々會津侯に仕へ、同藩の家老格を勉めた家柄であるから相當の門閥家であると云つてよからう、従つて氏の父五郎氏はあの有名な飯盛山で黒煙天に漲ぎる鶴ヶ城を遙かに眺みつゝ、朝露と散つた

白虎隊に是非共入隊を志願したが、年が四つ程足りない爲に加へられないので當時子供ながらも不平滿々であつたことであるが、然し白虎隊の精神と意氣は氏の父の體內にも溢れて、夫れが氏にも多分に受け繼いでゐたことである、後五郎氏は明治維新後一時は麻布鳥居坂で警察署長をしてゐたそうだが、當時西南戰爭が勃發したので彼は自から進んで志願して警視廳の抜刀隊に編入されて薩南健兒を相手に各地に奮戦したのであつた。その内に勝海舟の所謂……拔山蓋世の英雄……も故郷城山岩崎谷の露と消へると共に、この役も鎮定したので五郎氏は一旦歸京したが、感ずる所あつて官を辭し、廢藩のために多くの士族が職を失つてゐた夫等の人々を引率して北海道に渡つて開拓事業を開始して成功を収め、現に今日殘されてゐる丹羽村を建設した人である。其處で生れた七郎氏は長じて明治四十三年には北海道帝國大學農學部舊札幌農科大學を卒業して農學士となつたが、更に京都帝國大學の法學部政治科に入つて在學中の大正二年に既に文官高等試験に合格した程の秀

才であると共に京都大學時代は亂暴者だと言はれる位元氣旺盛で多くの逸話を京洛の地に殘したとのことである、翌三年に卒業して間もなく時の府知事井上友一氏に見出されて東京府屬となつたが、これを振出として爾來累進して土木局の河川、港灣、庶務、道路の各課長を歴任したのであつた。大正十四年には在職の儘で鵬程萬里の波を冒して歐米視察の途に上り翌十五年九月に歸朝してゐる、昭和二年五月には道路課長の儘で復興局の書記官を兼任したが、間もなく始めて地方に出て岩手、埼玉の兩縣知事を歴任したが、昭和六年四月十四日に若槻内閣が成立すると、安達謙藏内相の下に現大阪府知事三邊長治氏に代つて土木局長となつたのであつた。

當時内務省各部の顔觸れを見ると、次官には潮惠之輔氏次いで次田大三郎氏で地方局長には三邊長治氏、警保局長には岡正雄氏、神社局長には石田馨氏、衛生局長には赤木朝治氏と云ふやうな面々であつた。この若槻内閣は頗る短命で成立後僅かに半歳餘の壽命を保つて昭和六年十二月十

臣に互解したので大命は當時政友會の總裁であつた犬養毅氏に降下されたので、氏は直ちに組閣に着手して同月十四日に所謂犬養内閣が生れたのである、これと同時に丹羽氏は社會局長官に轉じて氏の抱懷してゐた社會政策の實現に努力したのであつた、同九年七月に岡田内閣が成立すると共に後藤文夫氏が内相の印綬を帯びると、氏はその下に女房役として次官に拔擢されたが、翌十年六月に至つて二豎の冒すところとなつたので遂に職を退き相州鎌倉の長谷向原の縁戚に當る別荘で専ら療養に努めつゝあつたが、七月に至つて遂に起たず七日を以て當年五十一才で尙前途に多大の望みを殘して歿したのは、小にしては故人のため大にしては國家のために筆者は衷心より哀悼の念が湧くのである。

楮て氏の土木局長在職は前記のやうに若槻内閣時代安達内相の下であつたが、その就任は昭和六年四月十五日で社會局長官として轉任するために去つたのは同年十二月十八日であるから、この間僅かに八ヶ月の短期間であつた。更

に土木行政に對する氏の抱負を實行に移すには餘りにも短かつたのであるが、夫れでも此の間に於て失業救済土木事業豫算編成等に當つたり、又他方各府縣の土木事業を一層振興したことは顯著の事實である。殊に失業救済土木事業は氏の土木局長在職中に最も努力したことであるから、これだけはどうしても書かないで置く譯けには行かんと思ふのである。

全體土木行政……土木事業と云ふものは其のやり方如何に依つては産業の發展に資し延いては國力の増進に大に役立つところ甚大であるが、他面そのやり方を誤りこれを亂用すれば國家に莫大なる經費を浪費せしめ悔を千載に殘すものである。この一例は全然我國には當て餘らないが、彼の日清戰役の際支那艦隊は我が海軍によつて全滅された。

それで當時支那唯一の政治家であつた李鴻章は支那艦隊の再建のために資金を國民の乏しい懷から集めて置いた。然るに當時支那の實權を握つてゐた女傑西太后は支那艦隊再建のためにこの資金を使用するよりも自己一身の榮華のた

めにこれを流用したのであつた、遂に西太后は萬壽山離宮の大改修の土木事業にこの資金を使用したのであつた、而して資金が海軍から支出されてゐたから海軍の役人が此の一大土木工事等を監督し水の利用等に依つて天然の美を一段と發揮させたのである、今日北京に遊ぶ人々は必ず萬壽山を見物し、その美景に打たれるが、筆者も去る昭和十三年に東京市の囑託をしてゐた時に北支、滿洲等の狀況を視察に赴いた時に北京滞在は僅かであつたが、この萬壽山を見物して、その規模の宏大に一驚を喫したことがある、これ

等は所謂土木事業を悪用遂行した一例であると筆者は思ふたのであつた。これに反し今から約八年以前即ち千九百三十三年一月三十日にヒットラーが多年血の出るやうな努力奮闘が報いられて首相の印綬を帯びた時には、獨逸の全人口の約一割と云はるゝ九百五十萬人の失業者群が何れの街頭に溢れてゐた、それで産業の基礎を恢復するにも財政の危急を救ふにも亦國民生活を安定するにも、この破滅的な失業問題を解決するのが急務中の急務であつた、そこでヒ

ットラーは殆んど未曾有ともいふべき道路に河川に橋梁に水道に其他各般に互つて大土木救済事業を決行したのであつた、これが成功して僅か半年にして二百萬の失業者は減少を示し更に五ヶ年後の千九百卅八年の五月の末には九百五十萬からあつた失業者は完全な勞働能力なきもの十四萬人を含めて僅かに三十三萬八千人に減少せしめたのであつた、加ふるに他方に於てはこの大土木事業の結果獨逸の産業に大いに役立つて國力の増進に資するところ甚大であつた、これが即ち筆者の所謂土木事業善用の一例である。

丹羽氏が土木局長に就任した昭和六年は經濟界の不況は益々甚だしくこれに基因して多數の失業者は簇出した時であつた、故にこれを救済するの必要あると道路改良の急務なることに鑑みて失業救済對策の一として失業救済道路改良費を豫算に計上して大いに努力したのであつた、即ちこれまでこの道路改良計畫に於ては専ら補助政策を採りつゝあつたが、新に國道工事國直轄施行の制度を實行して千七百五十萬圓を以て政府自ら國道を改良すると共に、更に百萬

圓を以て北海道の國道を改良し又地方をして府縣道の改良事業を起興せしむるために、これに對して約六百萬圓を補助するの外、更に東京府及び横濱、川崎兩市三百萬圓を補助して、この區域内の道路改良事業を執行せしめたのであつた、そうしてこれ等の費用總額は二千七百五十萬圓であつて、この財源として約二千三百萬圓の道路公債を發行し又國道工事を執行した關係府縣に對しては五百五十萬圓を負擔せしめたのである、これが氏が局長在職中になした主たる仕事の一つである。氏は土木局長在職こそ短かつたがその以前には永らく土木局に在任して河川や港灣、道路の各課長に在職してゐたから土木行政には精通してゐると云へる。氏は曾て岩手縣知事時代に東北の道路に付いて、かやうに云つてゐる。勿論現今とは多少違つてゐるが兎も角記して見ると。

道路法が布かれて十有餘年を閲したが、此間路政關係者の努力と國民の要望協力と相俟つて幾多の改善は行はれたが、其結果東京大阪の街路は面目を一新したのは此

間である。京濱國道を始め東海道が順次改良せられ殊に橋梁は愛知、三重の縣界を畫する木曾、揖斐、長良の三大川架橋の外は總ての大橋梁は既に竣功し又着工されてゐる、阪神等の國道を始め山陽、九州、四國方面にも着々改良工事が起されてゐる。

と道路法制定當時を回顧して道路改良に付いては隔世の觀があると述べて。

然るに足を一度東北の諸縣に入るなれば、道路は舊態依然改良の跡は極めて少いのである、明治以來東北の交通に着目して其改善を期し其功績の遺れるものは古くは三島縣令が山形、福島に於て道路を改修し近くは原敬氏が鐵道敷設を行つたのであるが、交通の不便、道路の劣悪なるは實に驚くべきものがある。

と氏が道路課長時代に東北六縣の道路視察を行つた模様を述べて、政府が道路法施行以來「昭和五年」道路改良の爲めに支出した金額は既に三千餘萬圓であるに拘らず東北六縣に交付したものは僅に十數萬圓に過ぎないと指摘して

ゐる。次いで、

斯く東北地方に對しては其の恩澤が及ばないのであるか、東北には道路改良の必要がないのであるか、東北道路の實狀を詳にし東北地方民に親しく接するならば、彼等は如何に道路改良を熱望してゐるかは直に觀取されるのである、苟も自動車の通行し得る道路だにあれば危険を冒して交通してゐるのである、必要あるに拘らず交通し得ざる道路や腐朽既に甚だしく自動車は勿論馬車の通行にすら危険を感じてゐる橋梁が甚だ多いのである。然るに今日まで其の改良に手が延びぬのは東北諸縣の財政が頗る困難であるからであるか、一方政府の助成方針が國道及都市街路の改良に重きを置き、眞に地方産業の發展に重大關係ある府縣道の助成を輕んじて來た爲である。と政府從來の道路政策に一警告を與へて。

道路法布かれて現に十有餘年大都市内の街路と國道一部の改良を以て能事了れりと爲すが如き状態は速かに之を改めて眞に國民經濟を基本とした一切の産業合理化を

根本となし一切の生産費低減の一大要素たる府縣道改良が達成せらるゝことを望むものである。

と結んでゐるが、誠に我が國の道路政策上この方針を堅持せねばならんと考へられる。

楮て現代議士田中好氏は多年氏と共に土木局に居つた人であるが、丹羽氏に付いて縷々述べられてゐる。その内を摘記して見ると。

氏は負けぬ氣の持主であつた。夫れと言ふのも矢張り彼が會津藩士の息子として育つた爲めであらう。

と先づ會津武士の血を享けた氏の性格に付いて述べて、後藤内相「文夫」の手で行はれた地方長官の異動に方つても之を上手に片付けるか否かは後藤内相のバロメーターと爲るのであつた、當時、風邪の爲に病床に在つた氏は其の性格の命するが儘に行動して醫師の勸告をも斥けて出勤し更迭問題に没頭した、甲地から乙地に轉任せしむる程度の更迭なら見合すに如くはない、更迭の目的が人心を一新するに在る以上は適材を適所に配置しなけ

ればならぬ、之が爲めに老巧乃至は無能を淘汰する又已むを得ないとは彼の主張であつたそうだが、併し後藤内相は周圍の事情を考慮して政治的に決定せむとするので、之が評定に翌朝午前六時までかゝつた。其の爲に病情は頗る増進したとさる言はれてゐる。

かやうに氏は頑張の強かつたことを現はして、更に道路課長時代に及んで。

氏の内務省道路課長時代であつたが、自動車が発達するのに道路が悪い。そこで自動車専用道路の必要が論ぜられ之に關する對策を決定することと爲つた、氏は歐洲に於ける制度を研究して専用道路の性質を究め、我國に於ける普通道路の將來に稽へ専用道路に關する一定の方針を樹立した、其の後數年を経て制定された自動車交通事業法にも矢張り氏の樹立した専用道路對策が加味されてゐる位に夫れは學理的のものであつた。

と稱讚してゐる。次いで田中氏は氏が土木局との關係に付して。

大正七年土木局河港課長と爲つて以來、一時病氣の爲體職に爲つたが、岩手縣知事になる迄は土木局の各課長と爲つて一番永く土木局に居た、土木行政の改革を目論んだ有名な堀田貢氏は氏の手腕を信賴して各種の方面に手を伸ばした、氏は独自の見地で港灣法案を起草し今も夫れが有力なる丹羽案として尊重されてゐる、萎靡振なかつた道路の改良に關しても例の産業道路政策を提唱して遂に時の内閣に一大政策に掲げしむるに至らしめた、不幸にして其の計畫は内閣更迭の爲に實現しなかつたが其の後組織された政友會内閣が其の案に基いて産業道路政策を實現した如きは何れも氏に負ふところである。

更に大震災當時の氏のことに移つて、あの震災のときは帝都復興院書記官を兼任して地震内閣に於ける後藤新平總裁の下に帝都復興法としての特別都市計畫法や其他の附屬法令の制定に努力したことや、更に氏が知事時代に及んで岩手縣在任中に銀行破綻問題を手際よく解決して縣民を安堵せしめたことや、前長官のやり残した遊廓移轉問題を

解決したことや、埼玉縣知事時代には師範學校本館焼失の復舊、農事試験本場及埼玉學園の移轉新築、市の川改修、入間郡北部第二用水の改良等々、氏がなしたる仕事を擧げてゐる、而して田中好氏は最後に氏に付いてかように云つてゐる。

氏を評するに新官僚を以てする人もある、成程新官僚の自家本尊と言はれてゐる後藤内相の下に次官であつたからであらう、固より氏も亦例の國維會か何かの會員で官吏やら官吏たりし者を以て組織した團體のメンバーであつた、併し新官僚の團體の有無は問はないとしても腐敗、墮落した政治家の横暴を見せ附けられた憂國の士が、之を改革する關心を持するのは當然であつて、之を憂へないものは寧ろ無自覺者である、此意義に於ての官僚であつた、併し立憲國に於て官僚政治を行はむとするやうな氏ではなかつた、従つて其の意味に於ての新官僚でないのである、若し後藤内相が後者の新官僚主義を行ふとしたならば、氏は必ずや職を賭して争つたに違ひな

い、氏は筆者に語つて言ふやう、大臣と局長との袂撃を受けるやうなサンドイツの次官なら無いに如くはないと、此言葉に徴しても氏の次官としての信念と非官僚思想を窺ひ知ることが出來得やう、或は氏の態度が巧言令色的でない爲に官僚と言ふに在らば、氏の眞情を知らない巷間の浮言として評する價值はない。

と云つて丹羽氏の既往を追懷して。

氏が殘された内務行政の改革進展の中途に於て他界されたことが頗る遺憾であることと、氏が希望された荻窪の新邸に悠々自適さるる機なくして長逝されたことが残念である、爾後は内務省に氏の温顔を見ることが出來なくなつたか氏の抱負は今後も繼承されて内務行政の上に表はるゝことであらう、又そうすることが氏の靈を慰むるに唯一のものであることを強調する。

これが田中代議士の丹羽氏に對する丹羽觀とでも云ふべきものであらう、筆者は丹羽氏を全然知らなかつた爲めに、これに對して彼れはれ批判がましいことは避けるが、恐ら

くは丹羽氏はかような人であつたろうと思はれるのである。

筆者は或る日嘗て丹羽氏の岳父であつた松波仁一郎博士を日本大學の法學部長室に訪ふて氏に付いて話を求めたところ博士は、

丹羽と云ふ男は面白い男で最初は札幌の農科大學を出たが、これだけでは行かぬと云つて更に京都帝大の政治科を出て高文試験に難なくパスして最初は東京府屬となつて東京府廳に勤務して居つたようだ。その時私の友人であつた井上友一君が府知事をして居たが、或る日、井上君からわしのところに丹羽七郎と云ふ青年がゐる。人間も中々出来て居るし又仕事に付いてもしつかりしてゐて、將來益々有望であると思つてゐる。……どうじゃ娘を其の丹羽の妻にやらんか……と云ふことであつた。夫れで私は、まあ第一に健康はどうかと尋ねたら、井上君の話では健康はまあ普通じやと云ふことであつた。夫れで丹羽家のことを聞いて見ると、昔は會津藩の家老格の家

でもあり、又父の五郎氏はあの西南戦争の時には何んでも警視廳の抜刀隊に参加して賊軍平定に赴いたこともあり、其後は部下であつた會津藩士を連れて北海道に赴いて開拓事業に着手して、現在では丹羽村と云はれる一村まで出来てゐる位に成功してゐる、かやうに門閥もよし又父は勿論の事本人もしつかりしてゐるので、そこで話しが都合よく運んで丹羽氏と同じ會津藩の出で帝大の總長をしてゐた山川健次郎男と井上夫妻が媒酌人となつて呉れて、娘は七郎君の妻として貰つてもらうたやうな次第であつた。……嫁に行つてからも幸にしてなかはよかつたやうであつたが、或る時の如きは娘が来て云ふのは高等官といふものは大變よいものであるから早く丹羽も高等官になつて貰いたいものであると云つてゐたが、或る時娘が来て丁度家族のものと同食事中に理事官になつたことを電話で知らして來たので、娘はうれしくて食事を中途にして大急ぎで歸へつたやうなこともあつたよ……。

と博士はこゝで微笑されて、更に博士多少沈痛な氣持で、この娘も丹羽と結婚後約一ケ年にしてとう／＼亡くなつたよ。

と語られた時は、筆者は當時前途有望の青年……秀才に欣々として嫁し苟も琴瑟相和す、この間僅かにして再び歸へらぬ永久の旅路に先立だつた若き娘御……これを追懐する博士の胸中や如何と推察して筆者も亦胸中に迫る何物かを感じるのであつた。

丹羽の性格か……丹羽は非常に寡言の男であつたが中々親切の深い人間味たつぶりの男であつた、酒はあまり飲まないが俳句に興味を持つてゐる時にこれを作つて自からよろこんでゐたやうだ。……本省から始めて岩手縣知事になつて赴任する際にやつて來て色々話もしたが、私は君はこれまで一度も外に出たことがないからどうかな……と云つたら、何に赴任して見れば案外やつて行けるものと思ふてゐると云つてゐたが、果して大過なく相當の成績を擧げたやうだ、夫れから埼玉縣知事に轉任し

たがこゝでも亦然りであつた、中々力量も手腕もあつたやうだ、……丹羽は其後理學士で淺井といふ人の娘を後妻に貰つたが、その人に四五人の子供が出來た。何んでもこの人も純良でよい婦人と聞いてゐる云々。

とこれが嘗て丹羽氏の岳父であつた我國の海商法學の泰斗松波仁一郎法學博士の談であつたが、筆者は今度は一つ未亡人に遇ふて見やうと思ふて、四谷三光町十三番地に現住する正枝女史を訪ふたのであつた、刺を通じて來意を告ぐると、取次の女中は一度奥に入つて直ちに再び玄關に現はれて「どうぞお上り下さい」と應接室に案内してくれた。間もなく正枝子未亡人と筆者は對面したのであつた。そこで筆者は先づ例に依つて來意を述べてから「御主人の追懐談でも御聞かせ願ひたいのですが」と云へば、未亡人は謙讓な態度で。

主人は在世當時は誠に言葉が少なく云はば無口の方でありましたが、夫れでもよく私達に、今に世の中は大變かわつて來る、金なんかの價値は段々なくなつて來る、

人間は平等に總てが働く、そうしてその働くものが一番勝利者になるのだと常に云ひ聞かせてゐました。丁度今日の時代のやうになると申してゐましたが、この主人の云ふことが今日になつて見れば當つたやうな氣が致します。……そうして世の中の情勢を色々と云つて居りましたが、……私の父は理學士で地質學等を研究してゐましたが、丁度同郷の金澤の父の友人井上友一さんの媒酌で私は丹羽家に嫁いで來たやうな次第であります、主人は趣味といつたら、俳句とゴルフ位のものでした、旅行は大變すきで、餘暇さへあれば湯ヶ原や其他各地によく行つて土地の風俗や景勝を愛したりしてゐました、夫れも中々役所の仕事が多忙なので思ふやうに出來ませんでした。……酒は家庭でも外でも餘り飲む方ではなかつたやうであります、嫌かと云へば決してそうではなく、好きな方でしたらうと思ひます、家庭で子供等の教育に付いては常に無口でありましたが、腹のある教育せよと常に云つてゐました。

と、正枝子未亡人はかように話さられて更に筆者の間に對して。

主人の父は何んでも會津藩の相當の武士の家庭で育つた人で、昔鳥居坂の警察署長をして居たこともあつたやうに聞いてゐますが、後に西南戰爭に赴いて歸つて來て多數同郷の人を連れて北海道に行つて開拓事業を始めたと云つてゐます。

こゝで筆者は現在その事業はどうなつてゐますかと尋ねたら、未亡人は。

もう篤うに父も亡くなりましたし、又母は永らく病氣で五ヶ年間も病床にゐましたが、夫れも父よりずつと早く亡くなつたそうだし、又主人の兄も亡くなり他にこれを引續いで開拓を進める適當の人がおませんので、兄が北海道の現地に殘つてゐる位のもので御座います。と語られたが、最後に。

主人も一寸と二三日鎌倉に遊びに行つて、そこで突然發熱して非常に衰弱がもとで遂に昭和十年七月の七日に

亡くなつたやうな次第であります、未だ子供も小さいし
せめてはもう十年程生きてゐてくれたら何等かお役に立
ちましやうものを……。

と、未亡人は沈痛な氣持ちで語られたが、氏の遺子は四
五人あつて現在では皆未だ學校に通學してゐるとのこと
であつた、ついでに書いて置くが未亡人正枝子女史は女子教
育界では相當令名ある三輪田眞佐子女史の訓陶を受けた三
輪田高女出身の才色である。

前にも云つてゐるやうに、丹羽氏は各種の趣味を多分に
持つて居たやうだが、その最も得意であり又一番の趣味は
俳句であつたやうだ、これは氏の青年時代からのことで、
人が何か原稿を書いて下さいと要求すると、六ヶ敷ことを
書くのは眞平だ。……俳句で勘辯して呉れと言つた調子で
あつたそうだが、各地に出張して視察する際にも無言のま
ゝの態度で既に俳句が出来てゐるさうである、餘程俳句に
は練達堪能であつた、氏は俳名を好日庵と稱して澤山の作
句があるが、殊に昭和六年の春浦和の氏の私邸で開かれた

句會の席上氏の作句たる。

春曉や牧に放てば嘶ける

が最高點の句として列席の俳人仲間を一驚せしめて、氏
自身も亦得意であつたさうであるが、爾來このグループの
會を「春曉吟社」と名づけて月に一回運座や吟行をつづけ
て浦和の私邸で雅苑を開いてゐた。今現に浦和に残る春曉
吟社は好日庵たる丹羽氏がその産みの親である、今茲に氏
の作句二三を撰んで見ると、氏は十和田湖で。

水際から若葉の山の櫻かな

と云ふ句があり、又北海道函作で水害視察の時には、

蟲喰ひの豆抜き見せて訴ふる

とある、實に穿つてゐる名句である。更に。

疎林隔てゝ汽車ゆく音や風光る

行く雁や夜釣に慣るゝ水明り

半天を枕に憩ふ蟬時雨

等種々の作句がある。殊に晩年内務次官の重職に在つて
湯ヶ原に病を養ひつゝあつた時に、

湯氣立て、唯冬空を眺めけり

と淋しい環境を寫してゐるなど實に氏に取つて感慨無量であつたらう、この句と。

南天の方より陽さす今朝の春

が、氏の絶句となつてゐるそうである、氏は故人となつてから浦和時代の俳友高橋秋刀氏が俳友と相謀つてその遺稿を整理して、尙丹羽氏は生前橋本八百一畫伯の繪を愛好して居たのに鑑みて、特に同畫伯に適當なる表紙畫の考案揮毫を依頼して「春曉」と題してこれを印刷に附して氏の

知人俳友に配布したが、故人の作句を新年と春夏秋冬に區別せられて、その内では伊豆祐親の墓や、日本ラインの大山や、祝三十年勤續村長に付いて、東郷元帥の國葬、十和田湖、蛇沼農場、九月二日埼玉縣廳に着任、吉水院、横利根開門、栗林公園、浦和町所見、一宮學園を訪れる時、年末にせまり病臥す、等種々の感想なり所見が俳句に依つて如實に現はされてゐる、これを見ても氏は如何に俳句に多大の趣味を持ち、又俳句に依つて其の感想なり所感を現

はさうと勉めたかが窺はれるのである。

筆は奔馬の如く走つて、この順序を無視してゐるが、今度は氏は社會局長官をしてゐたときのことを少しく觀察することにする、全體社會局といふところは氏がこれまでゐた、土木局とは全然異つて其役所の性質上非資本主義的な問題は多分に含まれてゐるところのである。氏の就任當時は労働者災害扶助法や労働者災害扶助責任保險法等の實施でなか／＼随分骨が折れたやうであつた、これも田中氏が云つてゐるところであるが。

氏は資本家の息子として生れたが、其の持する思想は労働者否な弱者の味方であつた、失業救済事業實施の場合でも之に依つて失業労働者を救済するのは當然のことであるが、夫等事業を監督する智識階級者も相當要る筈だ、夫等の智識を具備してゐる者が職を得むとしても求むることが出来ないで遊んで居る、夫れは傳を以て頼んで來る連中ばかりを採用し頼むに緣故のない者は矢張り社會の下積と爲つてゐて不都合であるから、是等を採用

せよと強談されたあたりは氏の主張を遺憾なく發揮してゐる。

と。この點を觀察しても、氏の思想は單なる資本歐歌主義でなく、又資本萬能の思想でもなく、常に社會政策的な思想の持主であつたやうに思はれる、從來問題となつた兒童虐待防止法も氏の手に依つて完全されて多くの憐むべき兒童が救助されてゐる、氏はこの外にも種々と社會政策に付いて考慮してゐたが、餘り永く其位置に止まらずして内務次官に榮轉したのは社會政策遂行上には遺憾であつたやうに思はれる。

偕て丹羽氏はどういふ人であつたか……これは筆者は前記したやうに氏には一面識もなかつたから、筆者独自の見解でこれを批判し又彼れ是れ云ふことは慎まなければならぬ、只だ第三者の觀るところを綜合して見ると寡言にして一見他人に對しては無愛憎のやうに見へるが、それで中々人情味の豊かな人であつたとのことである、これには筆者も肯定する材料を持つてゐる。夫れは氏が埼玉縣知事から

土木局長として本省に戻つて來た時に局員一同は双手を擧げて救神が來たといふて大に喜んだとのことであるが、この一事を以てしても氏は人情味に溢れてゐた人であることは間違はないと思ふのである、話は少しく脱線するが、孔子教即ち儒教は人情味に付いてこういふことを云つてゐる。

仁といふ文字を分析してみると「ふたりの人」といふ意味である。今見ず識らずの二人が相對した時、この二人は天賦の至情によつて、同類愛を感じるに違ひない。人間はその感情が純真な限り同胞を愛する本能がある。然らずんば家族生活、社會生活、國家生活の如き團體生活は成立しない筈である。孔子も樊遲から仁の意義を訊ねられた時に人を愛すと明言してゐる、一言すれば仁とは俗言の人情とか思やりといふことに他ならないが、これが人間を高尙になし人格を高める所以である。

と。而してこの言葉を以て丹羽氏を批判すれば、人情味が豊かな人であつたから自然其の人格は立派であり敬服するに値すると云ふて可なりである、夫れは氏が課長在職中

氏に反抗的な態度を持って居た某人が突然病死した、其時氏は大臣官邸に於ける會議に出席するを斷つて急遽病院にかけ付け其の人の靈を慰め遺族の將來に付いて吾が事のやうに心配されたといふことである。これも畢竟人情味……仁の發露である。氏は又一面剛直なところがあつて氣骨稜々たる威容と悠々迫らざる態度とは維新の英傑西郷や木戸には遠く及ばないかも知れんが、當代官吏中には珍らしい方であつたやうだ。上長に對しては是は是とし非は非として十二分の意見を吐露するの腹は出来てゐたやうだ、又氏は常に俗界の些事にのみ醜観してゐては人間味がないではないかと云ふてゐたことであるが、此の調子であつたから公私の行動は極めて應揚であつて常に大所高所から事物を觀察して大局を判斷して誤るところがなかつたのであらう、これも亦氏の素質の然らしめたところであらう、加ふに頭腦は明晰で時代を見る眼は餘程達觀の士であつたやうだ、荀子の政治説に依ると。

人間は社交的な動物である。夫れ故に人類は外界に適

應せんが爲に集團生活を形成する、若し人間が集團生活をなす時に只だ自己の慾望のみを主張して他人の慾望と妥協することを欲しないならば、個人は各々孤立して社會の團結力を發揮することが出来ない、實際、個人の獨力を以てしては猛獸にすら勝ることは出来ない、故に人間は自己の慾求と他人の慾求とを合致せしめて一致團結を堅持し、以てこの團結力に依つて外界に適應し或は外力を防禦しなければならぬ。

といつてゐるが、この理由に依つて君主が強固なる統治權を有して國家が成立し、又各種の法制が確立して人民が強固なる團結力を有することが必要となつて來る譯であるが、恐らくは氏の國家觀念もこの見地から發作してゐるのではなからうか。これは筆者は氏の官界生活から觀察して斯く思ふのであるから、若し誤つてゐたとするなればこれは筆者の誤斷である。

今や我國は内外共に重大革新を有する時に際會してゐる、東亞大共榮圈の確立……高度國防國家の完成は如何な

るものを備へ置いても遂行せねばならぬ當面せる眞に國家の重大問題である、その高度國防國家の建設完成は日滿支を一環とする國防國家體制の強化を目標として國防、人口、政治、經濟、文化的諸計畫を國土との關係に於て調整し綜合的、且合理的目的に向つて構成し以て國土の綜合的保全と利用開發の計畫を樹立し、一貫せる指導方針の下に時局下諸般の政策の統制的推進を圖らんとするのが即ち國土計畫である、いふまでもなく、この國土計畫は工業立地計畫、農業立地計畫、交通計畫、水利計畫、人口分布計畫、教育文化制度の配分計畫、行政區劃の整備計畫、等が含まれるのであつて、過般内務省の國土局設置の如きも多分、この大方針の基に國土計畫の一部に關聯して設けられたものであらうが、既に外國に於ては米國、獨逸、蘇聯等が既に之を實施してゐるが、併し盡く我國と其事情を異にしてゐる。而してこの國土計畫は高度國防建設の現段階に於ては急を要する緊要な問題であるが、又平時に於ても極めて重要である。夫れは例へば人間の場合適材が要求される様

に工業の建設にも適業適所がその能率を高め、その經營を合理的にする所以である、殊に東亞の新秩序を建設し日滿支を一環としての經濟發展を計らねばならぬ現狀に於てはこの目的を達成するために日滿支を通じての綜合的な國土計畫が絶対に必要とすることは詳言を要しないところである、ある工業部門を滿洲に建設するのが合理的であれば、内地にこれを建設することを抑制するの必要があるは勿論原料工業は大陸に、加工業は内地で發展せしめるのを合理的とすれば、國土計畫に従つてこのやうに指導すべきである、又國土計畫は只だ單に經濟的な立場からの必要とするのみではない、國防上特に防空の關係からも重要である、例へば工場を建設するにしても經濟上の條件が具備してゐるから何れの地點を撰定してもよいといふ譯には行かぬ、夫れは從來の如く工場の密集は防空上危険であればこれを地方的に散分せしめることが必要となつて來る、又密集せしむる方は却て防空上便利であるなればこの方法をとる必要が生ずるのである、又人口の點から觀察しても國土計畫

の必要が考へられるのである、人口の過大なる都市集中が經濟的にも文化的にも亦防空的にも更に保健衛生上の見地からも重要問題であるが、國土計畫の樹立に依つて都市人口の膨脹を適度に抑制し或は分散を行ひ又新なる都市の建設計畫等も必要となつて來るだらう、鐵道や道路等の交通と産業との連絡を合理的にすることも、亦治水や水利等も國土計畫の重大な任務である。

かやうに大東亞共榮圏の廣範圍に於て未曾有の變革が行はれ又行はれんとしつゝある、従つて國家は益々人材を要求すること大なることを思ふと丹羽氏の如き識見高邁にして内務行政改革等に日頃多大の抱負を持つて苟も力量手腕を有する所謂人材が益々必要となつて來る、殊に又官界の一大刷新を圖るといふことも現内閣は企圖して、既に這般の閣議でこれを決定し八月十四日までに企畫院に提出する筈のが大分遅れて漸くこの程提出と見たやうな次第であるが、しかも其内容は企畫院自體の考へてゐると可なり隔があるやうだ、これに付いて新聞紙はこう云つてゐる。

近頃大分國策會社や統制會社が出來、役人の天降りが多いが、餘り香しい成績を擧げてゐない、重役の報酬なども三百萬圓位の會社で七萬圓も取つてゐる。普通の民間ではこの位の會社で一萬圓位が精々だ、之れでは成績が上る筈はない。この點統制會社は例外との事だ、それならまだいゝが役人が天降りの場合は直接監督の立場にあつたものは、その鐵則を免れる爲に、暫時無關係の役所に腰掛的のゐてから堂々と入りて行くが、却々拔道はあるものだ、勿論悉く之を信するものではないが、官界も新しい情勢に適應せず犠牲は總て民間で負へといつた態度である限り企畫院ならずともあきれる外はない。と書いてゐるのを見て、一層官界には腹の出來てゐる立派な人物を要求する、然るにこのやうな人材が早世されたことは國家のためにも惜みても餘りあると云ふより他に言葉はない、この一言を以て本稿を擲筆することにする。